

Ann. Rep. Asahikawa  
Med. Coll.  
1979, Vol. 1, 57~71

## 19世紀ドイツの偉人変人

——その1 1820~30年代——

丸子基夫

### I. フランスの1830年革命

ヘーゲルが Jena 大学で助教授だった時、プロイセン軍を完敗させたボナパルト皇帝を見て「世界史がそこを歩いている」と歎じたその怪物的英雄が、イギリス・ロシヤ・プロイセンの大同盟によって遂に敗北し没落して (1812~'15) から十数年後もフランスは依然とし王国であり、大革命の際の亡命貴族に10億フランを補償する法律が通ったり、その数年前には出版の自由が禁止されたりで、凄惨な反動の嵐が吹き荒れていたが、経済社会においては既に工場生産方式と技術革命の波が強く押しよせていて、金融家・商人・町工業家・富農らの権利要求とそれを支持鼓舞する学者たちの自由主義の声も不退転の決意を示していた (サンシモン、フーリエ、ギゾー、セー)。技術の分野でも当代フランスの発明にかかるものでは、アンペールの電気力学、ファルネロンの水力タービン (共に1827) があり、フランス初の石炭運搬用鉄道 ('23) と初の大吊橋 ('24) の建設、煙管ボイラー ('27) やミシンの発明 ('30) もこの期にぞくする。'27年の選挙で反政府自由派が進出していろいろ尖鋭化していた政権抗争は遂に'30年の7月に火を吹くが、三日間で自由共和派が市街戦で勝利を占め、<sup>エガリテ</sup>フイリップ平等公 (1793年処刑死) の息子が憲法を改正して即位する。正しく「Vive la Liberté guidant le peuple!<sup>(註1)</sup>」であり、また出版と新聞の増大した力がみごとに発揮された事件でもあったのだ。

この7月革命がヨーロッパの各地に及ぼした衝撃は40年前の大革命のそれに劣らぬものだった。ベルギー市民が闘ってオランダから独立し、冬はワルシャワに独立闘争をわき立たせ、マツイーニに青年イタリア党を結成させてオーストリーを脅かし、ハイネとベルネをして永遠の専制国ドイツを捨ててパリに住まわしめ、60歳のヘーゲルは'30年12月13日、怒り驚きながら手紙に記している。「それにしても現在は恐るべき政治的関心が他のあらゆる関心を呑みこんでしまった。——これは正しく一つの危機だ。以前に価値をもっていたものが、今はすべて問題視されているのかと思われる。哲学には、無知

や暴力や、このすさまじい雑音をたてる悪しき情熱に立ち向う力がないので、こんなに楽々と腰をすえてしまった連中の間に哲学が割り込めるとは私には思われない。<sup>(註2)</sup> 古代史家ニーブールが彼の「ローマ史」に'30年10月5日付で記した序文において、現代はローマ世界が3世紀頃にこうむったような破壊に脅やかされている、福祉・自由・教養・学問は破滅に瀕し、未来は非文明のとりこでしかない、と深い諦めを吐露したのに応じて、もう何年も前から19世紀の産業化と平等化とナショナリズムを不条理で混乱したものと信じていた81歳のゲーテは、「いや非文明はもう始まっている。我々は既にそのまっ唯中<sup>(註3)</sup>にいる。」と断言した。英国での'30~'32にかけての中産階級による合法的な選挙法改正運動も7月革命に鼓舞されて一層大衆性をおびた。「エジンバラレビュー」編集長シドニー・スミスの言<sup>(註4)</sup>：「すべての若い女性は改正法案が可決されたとたんに、結婚相手を見つけ出すことができると考えているし、また若い学生たちはそのとたんにややこしいラテン語科目は廃止されるし、菓子の値段も引き下げられるだろうと考えている。伍長や軍曹は給料が倍増されると確信しているし、また、へっぽこ詩人たちは自分らの詩が世間から歓迎されるようになることを期待している。……だが他の場合にも常にそうであるように、これらの馬鹿者どもはいづれも失望のどん底に突き落とされるだろう。」お膝元フランスでの冷静な政治学者ド・トックビル(1805~'59)の意見はどうだろう。「貴族および卑賤な民衆を除外した中間階級の勝利は1830年頃すでに完全かつ決定的であった。<sup>(註5)</sup> 中間階級はあらゆる官職に侵入し、実務にたずさわって公共の金銭で生活することに慣れた。その結果として、平均した裕福さが急速に発展した。中間階級の特徴は最初の平民王(ルイ・フィリップ)が行う統治の精神上的態度ともなった。……この階級は政權をうけ継ぐと間もなく、個人的事業の外観を呈した。それは権力の中に、やがてまた自分の我欲の中に保塁を築いて立てこもった。彼らの代表者たちは国家の要務より自分一個の事のため、国家の勢力より自己の安易な私生活のため心を砕くのだった。しかしこの個人化と同時に、中間の平面をめざす思い切った水平化(=標準化)が行われた。その平面では自己の利益と公共の利益が解き離しようもないほど混同される。独創的な知識やひどい無智が少いかわり、誰も彼もが半可通である……」<sup>(註6)</sup>

こういう社会的雰囲気の中では、ナポレオン戦争時代(1796—1815)に青少年期を送った世代が、文学や劇場や音楽の世界においてロマンチズム(V. ユゴーによれば『詩における自由主義』)に走るのは必然であろう。折りしもこの時点に、E. R. クウルティウスが『ロマン派文学のボナパルチズム』<sup>(註7)</sup>と巧みに名づけたバルザック、スタンダール、ユゴーらの画期的な作品が生まれたのだ。「ゴブセック」、「あら皮」、「赤と黒」(作者自身これを「1830年年代記」と呼んでいる)、「クロムウェル」、「エルナニ」、「ノートルダム・ド・パリ」、そしてミュッセの詩集「スペインとイタリアの物語」など。人民共和派の詩人の歴史家ミシュレは'33年にその衝撃作「フランスの歴史」の初巻を世に問うた。ここ

に短い詩がひとつある。ユゴーの熱烈な戦友であり、「ファオスト」を初めて仏訳し、E. T. A. ホフマンの怪奇幻想小説とシューベルトにいかれた鬼才ジェラル・ド・ネルヴァル(註8) ('08~'55)の青春の賦「リュクサンブールの小径」である。1832年、ゲーテ没年の作だ。

Une allée du Luxembourg

Elle a passé, la jeune fille

Vive et preste comme un oiseau:

A la main une fleur qui brille,

A la bouche un refrain nouveau.

C'est peut-être la seule au monde

Dont le coeur au mien répondrait,

Qui venant dans ma nuit profonde

D'un seul regard l'éclaircirait !

Mais non, — ma jeunesse est finie…

Adieu, doux rayon qui m'as lui, —

Parfum, jeune fille, harmonie…

Le bonheur passait, — il a fui !(註9)

エラバセー ラ ジュヌフィユ

ヴィヴェプレスト コムアノワゾー

アラマン ヌヌフルルキブリユ

アラブウシ アンルフランスヴォー

この小さい詩には自由主義革命も産業家たちの自負も関係が全くあるまい。これは永遠なる青春惜別の歌である。饒舌でけんらんたる修辞家の多いフランス詩界には稀な素朴明快さだ。「詩は感情でなく言葉で作るものだ。」第1節には少女、小鳥、手にもつ花、口にリフレイン、とすべて揃っている。第2節では「この世に唯一人」、「その心こそわが心に」、そして「わが深き闇の中に来りて、その一目もて奥底を照らすならん」とつづいて、第3節の「わが青春はとく終りぬ、甘き光も倅せもとく去りぬ」で結ぶ。「香り、若き乙女、調和音」と今一度なつかしんで歎く。もしかしたら、貴族でドイツ流の Romantiker であるネルヴァルは、やはり実利的で堅実で野心満々たるプルジョワジーはととてもやりきれん、と早くから諦めていたのかもしれない。逆の意味で、卑賤の出で

あるジュリアン・ソレルが中産階級を憎み、うらやみ、楯突いて、20台でロマン主義的に自滅し去ったように。

## II. 非時代的な自由の経世家リスト

後年の無政府的社会主義者ブルードンは20歳のとき故郷 Besançon の印刷所で、同郷の経済哲学者シャルル・フーリエ (1772—1832) の “Le Nouveau Monde industriel et sociétaire” “産業的・協業的新世界” (1829出版) を校正して、「私は6週間のあいだ、この奇妙な天才のとりこになった。」<sup>[註10]</sup> フーリエ主義とは要するに、自由な意志で参加する労働によって、成員の各々に生活の安定と幸福を得させるべく、調和的に構成した諸々の人間集団の中で各個人が協業する社会をめざすものだ。大革命いらいの数次の農地分配によってフランスには無数の自作農民と、それと並んでアトリエ (仕事場) で親方とともに手工業的な労働にしたがう協業的職人 (出来高払いで賃金をもらう) の多数が生活している現実があり、国民の多数派を成すこれらプチブルジョワと小中農民こそがフーリエの「空想的社会主義」の対象であり、同時にまたバルザックやデュマの小説の読者であり、更にクールベやミレーの画題ともなったのである。

ところでライン河の向う岸からエルベ河を越えてポーランド平原にまで拡がり、ハープスブルク家とホーエンツォレルン家を両横綱として35もの君主領国と4自由都市に分れている Deutscher Bund ドイツ連邦 (メッターニヒの作品!)、<sup>[註11]</sup> ほぼ3000万の人口 ('15年) をもち、<sup>[註11]</sup> フランクフルトに執行権力なき連邦議会をいただき (オースタリ代表が議長)、あらゆる政治的自由主義に対して敏速に弾圧を加えたドイツ連邦にあって、経済・社会の変化はこの時期にはどの様なものだったか。

ごく大づかみにいうと、イギリス社会が「経済」の局面を最も強く打ち出し、フランスでは今尚「政治」の次元が優位を占めているのに対し、ドイツ諸国では政治と経済のいずれの次元もまだ確立されるには至らず、その空白を充たすものが、広い意味での「思想」であった。キリスト教や家父長的家族主義 (例えば「ヘルマンとドロテア」)、また国粹的風潮などの「イデオロギーの膨大な地層」がドイツを蔽っていたが、同時にその地層から一步一步抜け出すための批判の努力も実りつつあった。ドイツ古典哲学からフオイアバッハ、マルクスにいたる「哲学」的達成がこれである。<sup>[註12]</sup> そして7月革命はこのような社会においては、その原因が物質的窮乏からはとても説明されず (事実は'20年代フランスの農業不作と商業恐慌も原因の一つなのだが)、K. レーヴィットの引用するインマーマンの言葉でいえば、その動因が信仰ではなくて「政治的なもの」であるにも拘わらず、宗教的運動のように、精神的な衝動と感激からのみ説明することができるという。<sup>[註13]</sup> 産業革命の面では大陸封鎖令の為もあってかなり遅れ、紡績機の個別的な輸入は見られたものの、なお順調な発展をとげたとはいえず、ルールとシュレーゲンの良質の

石炭は英国工業をうるおすのに役立つのみで、ようやく'30年代中期からの鉄道建設に刺激されて、採鉱・製鉄業の近代化に向ったのである。<sup>(註14)</sup>

ところが早くも1819年に一人の独学の経世家が南部と中部を根城として、関税問題、道路の改良と延長、商工業者の大同団結、行政機構の民主化などに全ドイツの視野で取り組んでいた。Stuttgartの南30kmにある帝国直属自由市 Reutlingen 出身で皮なめし商の伴Fr. List(1789—1846)である。小学校を終え家業を手伝い、将来の職業決定を目前にした時、伝統を誇るこのギルド都市が神聖ローマ帝国解体のあおりを喰って Württemberg 侯国に強引に併合され(1803)るといふ悲運にあう。リストが14歳、シラーの「メシーナの花嫁」が初演され、アメリカ探検中の博物学者 A.フォン・フンボルトがメキシコ高原の精密な地図を作りつつあり、ヘルダーリンに狂気の徴候がはっきりしだし、執政ボナパルトが王党派の策謀を粉碎して皇帝位に近づいた年である。学業抜群だった皮革屋の伴は17歳から書記のコースに入り、ナポレオン没落の'15年には財務書記官として首都で活躍する。彼は職務に必要な行政法・商法・会計法の研究を深めることは言わずもがな、仏・英・伊の諸言語からナポレオン法典、リカードのポンド下落論、シュタインの関税改革論をも独学でこなし頭角を現わし、高等法院長官でチュービンゲン大学督学官でもあった政府実力者ヴァンゲンハイムにその力量を認められて、'17年に新設の同大学国政学部の教授に任命された〔行政・財政実践論担当〕。ところが28歳の「成り上り」教授は前からの因縁もあって、当時王国('06年くらい)をゆきぶっていた一大政争に全力をあげて取組む。すなわち国王と内閣がフランス立憲思想の影響の下に新憲法を「下付」しようとする<sup>(註15)</sup>と、300年来の Landständeordnung をドイツに残る唯一のものとして守ろうと頑張る「旧権論者」——弁護士で詩人のL.ウーラントもその有力な一人——が強硬に反対して3年ごしの泥沼闘争となっていたのである。リストは新聞「シュヴァーベン民衆の友」によって憲法改新と行政改革を熱烈に訴え、文相ヴァンゲンハイムの妥協案によって政府は辛くも新憲法を通すのだが、'18年に文相が閣外に去ると教授の身边にも中傷や不信が迫ってきた。チュービンゲン大法学部のOBであり、シュトットガルトでは法務省の秘書官として先輩だったウーラントを敵に回さなければならなかった彼には、今や支持者が去ったこともあって、まことに居心地の悪い職場となったわけだ。(この時のウーラントの政治詩は甚だ人気があった。)

決断の時はすぐにやってきた。この春のフランクフルト見本市に集まったドイツ実業家の一団と会談して、リストは彼らと『ドイツ商工業連合』を創立してその法律顧問を引きうけ、ドイツ連邦議会に請願書を作製し呈出していた。「外国」への無届け旅行に加えて「外国」での政治活動は王国官吏の服務規定を犯すものだ。前文相がヴェルテンベルク代表大使としてちょうどフランクフルトに駐在していることもあって、中傷と非難は増幅され、うんざりした彼は思い切って'19年5月に官職を辞して一人となった。

4月フランクフルトに創立された『連合』の目指すものは何か？いや、リストをそこまで動かした契機は何だったのか。一言にしていえば、機械工業の産業革命はドイツの遅れた手工業経済を、それと共に農業経済をも全部ひっくるめて壊滅させずにはおかない。イギリスの安い綿製品と企業秘密の技術はナポレオン軍よりも無残にドイツ民族を苦しめるだろう。既にプロイセンは'15年にライン州を併合して以来、エルベ以東の農業の本土と西の新工業領土を打って丸とする単一税制をしくことに'18年5月に成功し、'14年の対英貿易再開らしいの苦境に対処しているのではないか。(技術家Fr. ハルコルトは'18年ドルトムントに一大圧延機工場を作って、更に英国の機械技術の導入を計画しており、エッセンのクルップ製鉄株式会社の創意と企業精神の旺盛さは英国をしのぐと噂されている。)全ドイツの実業家がどうして大同団結できない筈があろう。国内の関税障壁を撤廃し、ドイツ連邦が外国に対し適度の保護関税の防壁を設けることが焦眉の急なのである。同じ年にバーデン大公国の太蔵局長ネベニウスもその優れた覚書によって各国の具眼の士をその方向に勧誘している。政治学者テオドル・ホイスはこの時期を評して“Es war ein geschichtlicher Augenblick (歴史的な時)”<sup>(註16)</sup>と<sup>(註16)</sup>いっている。だが請願は一私的団体のものとして議会に全く無視され、思いつめたリストは各国の宮廷と政府を回って熱っぽく説いて歩いた、なんとウィーンまで足をのぼしてメッターニヒ外相とも会ったのだ。同じ年3月に起った学生ザントによる思想的殺人事件の処理に腐心している最中だった外相は、新時代の通商・交通問題を説く経済学者のうちに“自由主義思想家”をかぎつけ、過激派学生組織と底流でつながる“民主主義デマゴグ”と彼を規定する。そして最近話題になり始めていた当の<政治経済論者>がわが前に立ったことに深い溜息をついたことであろう、「時代はやっぱり大きく変わったのだな」と。折しもこの年英国の蒸気機帆船「サヴァナ号」が大西洋をわずか29日で横断したが、この技術の一大勝利のニュースは、たぶんメッターニヒの保守主義の信念を一そう強固にしただろうし、ゲートをして現代を不可避的な「便益の時代」として憂慮せしめたり、リストはこれによってドイツの惨めな工業がいよいよもって産衣の中で窒息死するのだと危機感をつのらせたことであろう。しかしこの正しい危機感などおかまいなしに、各領国の為政者はリストをば自国の主権を犯す「統一主義者」として、同じ年に「ドイツと革命」の著書の故にプロイセン政府から追跡されたヨーゼフ・ゲレス(1776-1848)と同類の政治アジテーターと見なしていたのだ。ザント事件をきっかけとしてドイツ連邦は新聞條令とともに大学條令をも発布して('19年9月のカルルスパート決議)、学生と教授をきびしく監視しだした。ゲレスはスイスに6年の亡命を余儀なくされ、後年の社会・教育活動家ハルコルト(1793-1880)もこの頃は機械と道路の改良に没頭するしかなかった。400年の封建制には「歴史的な時」もまだ未熟だったのである。

経済の面での努力において一敗地にまみれたリストがすぐ続いて直面したのはその翌

年の故国での内政問題である。国際的にも知名人となった行動力の人、筋金入りの改革派元教授はロイトリンゲン市の誇りであったが、王国憲法が旧身分制派との妥協の上に'19年成立すると、自由都市の伝統いまだ活発なこの市民は、30歳を越して被選挙権をえたリストを代表議員として'20年の暮王国議会に送り出した。彼は国会議員の職務というものを極めて広く自由に、たぶん英国風に理想化して考えていたらしく、間もなく体制批判に動き出す。選挙民の意を汲んでリストは大胆な筆致をもって、年来の持論たる行政刷新案を「ロイトリンゲン請願書」として議会に呈出する、15年以上の実務経験と将来への展望を総合した全く今日的 *aktuell* な提議だ。その内容の主たるものを列挙すれば<1>肥大化し硬直した、それでいてまるで自主性のない保身的な書記官・事務官体系を国政最大の癌ときめつけ、<2>県郡区の再編成と<3>課税の公正を強くすすめ、<4>裁判訴訟の公開と口頭弁論の導入を直ちに要求し、<5>自治制度の拡大（これは元の自由都市の復活を狙ってか？）を切望する、など。どれも皆まともで妥当な事柄である。しかしやはり時代の枠から大きく外れていて余りに急進的で民主的といわねばならず、又その表現がいかに率直、というより挑戦的であった。いうなれば「下からの改革プログラム」を突きつけたのだ、それも1年半前に難産の憲法を公布し給うた開明的君主の政府に向ってだ。「あのリストという小うるさい政論家は前から東の野蛮国、ルター教の牙城たるプロイセンと通じている策動家で、わが正統の王国を遂には1793年のジャコバン共和主義に変えようといううぬぼれた危険人物だ。国家体制への反逆の罪で裁判にかけろ。」かつての政敵ウーラントが今度は彼に味方したが、法廷と官庁が守旧派に固まってはもう勝目がなかった。国会から除名されたうえ、10ヶ月の禁固刑の判決が下った。'22年の春だった。さすがの自信家リストも投獄の恥に耐ええざストラスブルに逃げ、更にスイスからロンドンへ亡命したが、執念ぶかい貴族・官僚派は追及の手をゆるめず、他国政府も後難をおそれて亡命定住を許さない。メツターニヒ＝アレクサンドル一世＝Fr. ヴイルヘルム三世のトリオによる神聖同盟の威力をリストはこの時ほど身にしみて感じたことはなかっただろう。疲れ切って彼は帰国し、かつてシューバルトが幽閉されたと同じ要塞に閉じこめられ、軍服のえり分けという苦役を強制されたのである。故国はもちろん、全ドイツが彼を厄介払いする気になったのだ。ヨーロッパを離れて大西洋の彼方へ去るという約束の下にやっと5ヶ月後に放免され、35歳のリストは妻子と手を携えてUSAへ落ちのびて行ったのである、モンロー宣言によって旧大陸の干渉を排除しようと決意している若い国に何程かの望みをかけながら。彼の服役時は1824年、ロバート・オーウェンがインディアナ州に「新しい調和の村」を建設し、英国で結社取締り令が廃止された年、その前の年にはサンシモンの「実業家（産業者）の教理問答」が刊行されて、産業界の勝利とならんで労働階級の解放による社会変革を予言していた。下からのいかなる変革も不可能でいまだ「経済になじまぬ」封建国、ロ

マン派の詩や小説、ヴィーン派の音楽、そしてヘーゲルの国家哲学にどっぷりつかっていた Biedermeier 期のドイツ連邦にあって、政治的経済学者リストは遂に、時代から弾き出される *unzeitgemäß* な政治実践家なのだ。しかも皮肉なことに、彼がアメリカで実業だけでなく政治活動においても成功して、32年にジャクソン大統領からアメリカ領事に任命されてドイツに帰ってきたのは、彼がその為に粉骨砕身した南ドイツ関税同盟（ヴュルテンベルク—バイエルン）とプロイセン—ダルムシュタット関税同盟が、更に前二者に対抗する目的の《自由な貿易と交通の促進のための》中部ドイツ通商同盟（ザクセン、ハノーファー、フランクフルト、ブレーメンなど17ヵ国）が一挙に成立した後だったのである（1828年）<sup>(註18)</sup>。

### Ⅲ. 公共心に燃える技師ハルコルト

一般にはリストがドイツの鉄道建設の父といわれており、この革命的交通手段に対する彼の熱狂的なまでの肩入れと、更には悲劇的な彼の生涯によってもその名にふさわしいだろうが、実はリスト以前に鉄の軌道が産業にもたらす大効率をこの国で初めて説いたのは、ルールの技術家・企業家 Friedrich Harkort (1793—1880) であった<sup>(註19)</sup>。皮なめし工場から機械製造所、圧延ロール工場の経営者であり製作者でもあるこの鬼才が、たえず技術を改良し新しいアイデアを得るため英国を訪れるたびに感心したのは堅固な道路と鉄や木の軌道の延長だった。商品を多く造るだけでは商業にも利潤にもまだ到らない、それを大量に早く安全に運ばねばならない。海や河では蒸気船がすでに実用化されたし、運河もドイツでずいぶん掘られ整備されてきた。1825年の3月、リストがUSAに移住する頃、ハルコルトは新聞に一文をのせ、Elberfeld (今の Wuppertal) と Düsseldorf 間の貨物運搬が鉄道、さらには蒸気機関による鉄道をもってすればどのくらい速く安くできるかを試算してみせ、次のように締めくくった、「鉄道は商業の世界にいろいろな革命をもたらすだろう。職業熱心という勝利のワゴンが煙を吐く巨馬を前につないで走って、公共心に道を開いてやるような時代が直ちにわが祖国にも到来せんことを。」しかもこれは決して一時の思いつきなどではなく、ハルコルト社主は翌26年にも、郷土の先輩でプロイセン内政の改革者として有名なフォン・シュタイン男爵に「軌道論」なる論説を呈示しているが、その中に大いにモニュメンタルな一文がある：Gemeingeist heißt der Gewaltige, welcher die Wunder der Welt zustande gebracht. 「世界の諸々の奇蹟を成就した強者、その名は連帯の精神（公共心）というのです。」13—14年ナポレオン撃滅戦争に従軍して、終生「大尉どの」と呼ばれるのを好んだこの技師は関税や連邦議会の問題と並んで、或いはそれにも増して交通と教育の改新と全ドイツ一本化がドイツ民族の自己主張にとり最も緊急な仕事だと認識しており、Eigensinn 我執をすて切れぬ各領国政府と Eigensucht 我欲に燃える一般の実業家・官吏に対して、鮮明に Gemein-

geist の旗印をかかげていた。後年の社会労働問題・教育問題の先駆的政治家たるハルコルト代議士の片鱗がすでにうかがわれるのである。<sup>[註21]</sup>

だがドイツにおいて連帯の精神はいぜんとしてなお「思想」の段階にとどまっていた。それでもこの壁に挑もうと、帰国後のリストがライプチヒ——ドレスデン鉄道の建設にかかり始めた'33年、ハルコルトもプロイセン領であるミンデンとケルンを結ぶ鉄道の敷設をすすめる一文を草しているが、そのうちに彼の関心は蒸汽船のほうに移ってしまい、弟のグスターフがリストの盟友としてライプチヒ——ドレスデン鉄道をザクセン王国のために'36年に完成させることになる。リストはもう二度とヴェルテンベルクに帰ることなく、パリにでかけて論文を書いたりハイネに会ったり、ライプチヒ、フランクフルト、アウクスブルクと移って情宣と組織に奔走しながら、しだいに不如意な生活に落ちこんでゆくのであるが、いっぽうハルコルトは實際人の感覚からプロイセン国の動向に適宜に対応しつつ、ドイツ全体に新時代の明快な印象を叩きこもうと努めた。金を募金し技師を集めて蒸気船を新造し、'36年2月には国王Fr. ヴィルヘルム三世をそれにのせて共にライン河を下り、北海からヴェーゼル河を遡ってミンデンまで航行してみせたのである。翌'37年にはなんと嵐をつけてケルンからロンドンへの渡航にも成功し、ドイツ技術者の才と胆を先進国に示し、かつ全ドイツの「公共心」に熱烈に訴えることができた。彼の機械製作所はのちに世界的企業DEMA Gに発展するのであるが、「大尉どのの」は功成り名を遂げた後も、昔の質素な住居に鋼鉄王アルフレート・クルップを何の屈託もなく迎えている。

'40年頃から彼の大衆啓蒙の文筆と演説の活動は本格的となり、その論ずるところは技術史・税制・鉱山権・海軍力から学校制度・労働訓練制度・教員養成にも及ぶ先駆的な近代的な事項であり、とりわけ思想史的に重要なのは'44年の「下層階級の文明化と解放を妨げる諸問題について」なる社会労働論である。本書は、英国における程ではないといえ、ルール地帯ではすでに増大してきた工業労働者階級の貧困と搾取の実情を描写し分析し、「労働には Ehre 名誉・尊敬の念が結びついていなければならぬ」を根本理念としてこの階級の生活と教育の改善を実践的に訴え、一種の労働金庫や仲裁裁判法の導入をもすすめているといふ。<sup>[註23]</sup> 同じ年マンチェスターでは24歳の学者肌の産業人Fr. エンゲルスが問題作「イギリスにおける労働者の状態」を鋭意執筆中であり、'41年にはリストの苦難の名著「経済学の国民的体系」がアウクスブルクで刊行されていた。<sup>[註24]</sup> 政治の次元では歴史的な正統主義の重みの故にほとんどインポテンツであったドイツも、'40年代には平和と人口増と技術と商業の圧力によって思想の域から経済の国へと急速に変貌せざるをえなかったのである。しかしこれと対蹠的な典雅な Hannover 王朝における貴族支配の安泰さを、ハイネの「旅絵巻・北海編 ('26)」での描写からうかがってみよう。

「もちろんマダガスカル島では貴族だけが肉屋になる権利をもっているように、ハノー

フアの貴族は昔、似たような特権をもっていた、つまり彼らだけが軍の将校の階級に昇りえたのだ。だがドイツの軍隊で数多くの市民出身者が勲功をたてて将校の地位に躍進していらい、かの悪しき慣習的権利も弱体化した。然り、ドイツの全部隊が古い特権の衰退に大いに寄与したわけだ。彼らは世の中を広く回ってきて見聞も広く、とくに英国で多くを見てきた。又いろいろ勉強もしてきたので、彼らがポルトガル、スペイン、シシリー、イオニア海諸島など遠い国々の話をするのを聞くのは楽しみなことだ。彼らがそこそこで戦闘し、《多くの人の住む町々を見てその風習を見習った》のを聞くとまるで（ホメロスこそ見つからないが）オデュッセー物語を聞いている気がする。また部隊の将校の間には自由気質の英国式風習が多く残っていて、これはハノーファの旧式伝来の習慣とは、他のドイツ諸国で信じられているよりも遥かに対照的である。というのも我々はふつう英国の模範がハノーファに多くの影響を及ぼしていると思うからだ。このハノーファで目につくものといえば、馬が繋がれている Stamm-bäume（系統図）という木ばかりで、余りの多さにこの国は暗くて物がよく見えず、馬がいくらおっても先へ進めないのである。（中略）ハノーファ貴族の尊大さについてのあまねき苦情は主として、この国を統治している門閥、又は間接に統治していると思っっている門閥たちの若殿たちに向けられている。でも彼らだって同様に世間をいくら引回されるか、より良い教育をうけるかすれば、これら若殿方の欠点や不行跡もじきに直ってゆくだろう。なるほど彼らもゲッチンゲン大学に勉強にやらされるのだが、みんな一塊りに集っちゃって、話すことといえば彼らの犬や馬やご先祖のことばかり。近代史の講義などまず聞きはしない。（中略）若殿方も老君と同じで、彼らこそこの世の精華だが、我々ときたら唯の雑草でしかない、という同じ妄想。ご先祖の功績でもって己れの無価値を糊塗しようという同じ愚昧さ……。」

#### IV. 靴工徒弟が神学大学生になる

1830年代、人口約6万のケルン市で一・二を争そう靴工匠の店に働く最も腕のいい職人アードルフ・コルピング Adolf Kolping (1813—1865) は親方夫妻の期待のまなざしとその娘の秘かな愛情をいささか心苦しく感じながら、独自の将来計画を抱いて少なからず悩んでいた。まじめで頭も良い23歳の模範職人の魂の中には、かなり前から勉学への押え難い情熱が燃えていたからである。結局どうなったか？「来年の秋に高等中学校の編入試験を受け、もし成功したら大学に進んで神学・教育学をやろうと決心しています」と彼が遂に打ち明けた時、奥さんは思わず驚愕の声をあげ、親方は「うーむ」と腕を組んでしまった。「しかし娘さんは黙って前掛けの端をつかんで目にあて、声を忍びながら部屋から出て行った。それから数週間たって私は、私（の希望を叶えてくれて）を幸せにしてやることで、自らも幸せになろうという、全くキリスト的な立派なこの家族

のもとを去ったのだった。」<sup>[1E27]</sup>

1837年秋、じきに24歳になる靴職人は苦学力行の末ケルン市の名門校 Margellen—Gymnasium のTertia に入学した。彼がケルンの在の大農場に雇われている牧夫で一反百姓の小作であった頃、すでに産業革命はドイツでもベルリン、ルール、ブレスラウあたりを始めとして、(企業家の)成功と(技術の)進歩と(諸政府の)満足を伴ってその鉄の一步を進め始めていたが、同時に旧来の営業法や製法にしか頼ることのできないギルド業界を倒産させ、多くの小供を極低賃金で酷使して小学校にもゆかせぬ等の暗黒面を早くも露呈した。1831年以降リヨンで瀕発する絹織工のストライキ、'20年代にバルメン<sup>[1E28]</sup>などに起った紡績工・編物職人などの大量失業、40年代シュレーゲン地方での織工一揆などは余りにも有名であろう。企業家にも確かに言い分はあった。先進国の綿製品や毛織物の圧倒的な廉価と資本力に対抗するにはこれしかない、即ち本源的蓄積の不可避性という主張だ。しかし彼らの得る利潤もけっこう多く、その企業意欲は敬虔主義的道德に裏打ちされてやましきなど全くなく、むしろ、ドイツ民族の国家的統合(ブリテン・フランス・ロシアの如く)が政治的に先真っ暗であるならば、通商や産業技術のうでドイツ人社会を横に結合できるのは我々企業人(Unternehmer)・商人(Händler)を措いて他にない、という強い信念をもったのだ。文筆家や科学者はこれに助言しこれに協力するのが当然であろう。いっぽうヘーゲルはゲルマン人国家とその「法」をば、彼のあの der objektive Geist の人類史における最高の実現形態なりと賛美して話題となり、その弟子で宗教官僚でもあったFr. J. シュタールは「法の哲学」(1830—'37)において、国家とは神と世襲君主を魂と頭とし、教会・貴族・軍・平民の諸身分を骨肉血とする伝統的有機体であって、過去より未来に連続する歴史的秩序に他ならず、(フランスの如く)革命とか自然法的人権論とかによって昨日と切斷された今日の社会が造られるべきではない、と雄弁に説いて、ドイツの現状維持派、とくにプロイセンの守旧派(ブルジョワの一部も入る)を大いに鼓舞し、ビスマルク時代にまでも大きな影響を及ぼしたのである。シュタールは大学生時代にユダヤ教からルター教会に改宗し、後にプロイセン上院議員ともなった秀才で、'30年代後半から三月革命期の2年を除いてずっとベルリンの政・法・宗教そして官界の指導的イデオログだった。工業と通商と金融では断乎たる自由主義者のプロイセン財界も、国家権力の中枢に近づいて地歩を占めるためにはこうした保守原理を立て前としては認めざるを得ず、しかも彼らの日常の生活規範や従業員・労働者に対応する拠り所としてもこの原理はまさに最も当をえたものであったのだ。先進国との対抗上、ドイツ産業界は通商の自由の獲得と内国関税の撤廃を焦眉の急としてかなり早くかち取り(プロイセンの主導で)、その後も権利拡大に精力的に努めた反面、選挙権の拡張とか、小市民小農民の上級進学の世界増大といった政治的・社会的自由よりも、上述の経済的自由の方を大切なものと評価して満

足する傾向があった。<sup>[註29]</sup>教育・教養の理念もゲーテ時代の人文主義的・古典文学的・コスモポリタンの啓蒙思潮と実業的・国家目標的なものとの対立が深まってゆく。<sup>[註30]</sup>こんな底流を目敏く感じとってか、1837年、10年間のハイデルベルク留学から帰国した歴史哲学者エドガル・キネE. Quinet はフランス国民に向って厳しく警告した：「ドイツはもはやスタール夫人が1810年に余りにも愛情をこめて描いた国、形而上哲学者や夢想家の国ではない。ドイツは物質主義的かつ政治的な国で、我国では想像もつかないナショナリズムの虜になっている。特にプロイセンでは『昔の世界市民的非党派精神』にかわって、『すぐ興奮しカッとなるナショナリズム』が現われたが、プロイセンは能率的で、近代社会の諸課題に向って活発な活動を続けているから、早晚他のドイツ諸国を自分の型にあてはめるだろう。このための準備はすべて整っているが、一人の偉大な人物だけが欠けている。この人物が登場したあかつきは、フランスには災いなるかなだ。」<sup>[註32]</sup>文学史・美術史・風俗史ではBiedermeier (実直もの) と称される当時のドイツは、果してキネの主張するように、とげとげしい迄に自己崇拜的だったのだろうか。それにしてもこの25年後に遂に恐るべき鉄血首相が登場してくるのを、幻滅したかつてのドイツびいきは正しく予言したのである。

ところで我らの晩学青年コルピングはどんな動機から大学進学を志したのだろうか。彼は腕の立つ靴工で、親方からも店の後継ぎにと嘱望されている真面目人間でもある。だが彼は告白している：「私は当時のドイツの手工業職人の自堕落と低劣な仲間の中で暮した歎かわしい月日のことを思うと今でも身ぶるいする程です。こんな賤民の中に居続けるなんてとてもできなかった。」<sup>[註33]</sup>物静かで嫌そんな情の深い母親をもったことを終生感謝して止まなかったアードルフは根っからのクリスチャン的性格で、しかも学問を好み、人を神と家庭の愛に導くことに倦まなかった生来の教師でもあった。だが職人仲間の利己心や惨めなその日暮し性を改善してやりたいからというよりも、むしろ自己を認識し自己を救いたいとの求道精神が彼を勉学に駆り立てた直接の動機であったろう。高校の4年間はもちろん神学部受験のための猛勉に終始したが、この苦学生はまたセンチメンタルな詩をくどくどしい語調で沢山作っていて、数年後でも尚「黒と黄色に濁ったヴッパー川の岸边には <sup>グラーツィエン</sup>Grazien (美の三女神) も <sup>ムーゼン</sup>Musen (ミューズの九女神) も住める筈がない」とぼやいている。またケルンの北25kmには Solingen, Barmen, Elberfeld (この二町が合併して今の Wuppertal 市), Essen, Duisburg らのルール工業地帯がづらなっており、30年代にはすでにエンゲルスが記しているごとき産業化に伴う社会的矛盾と労働者階級の苦難が始まっており、<sup>[註34]</sup>学生コルピングは以前の友人同僚がそれにまき込まれて呻吟している例をいくつも見て聞いている筈だ。彼自身、就職した14歳の時からずっと物質的心配を免れなかったとのべているが、質素な家庭での勤勉の躰が底力をいつも発揮して貯金もふえた。カトリック教会への不動の信仰は、学生時代に知った

ロマン派の精神世界の研究、とくにミュンヘン大学時代（'41—'42年の3学期）に偉才 J. ゲレス（1776—1848）の歴史講義に傾倒することによって一層深まり、社会性を増し、己れの使命をはっきり自覚せしめた、即ち聖職者にして社会事業家コルピングを形成したのである。

靴工の徒弟として働きだしてから高等学校に編入されるまでが10年、ミュンヘンとボンで大学教育を受けてから司祭叙品を受けたのがその8年後、彼は31歳であるが、簡素な生活を愛し、勉強と祈りと教会活動への助勢に明けくれる柔和なコルピングの人生は、見たところ際立った行動も激しい情熱も波瀾を起こす人間関係もまるでない平凡な日の連続である。しかし彼の内面はある非凡な遠大な目標に輝いていた。既にミュンヘンの学生時代に彼は自分の昔の職業仲間たる手職人たちが産業革命のために失職し零落し、店や工場をもつ望みもなく絶望にうちひしがれるのを坐視しえず、彼らを説教と教育によって相互扶助的組織に団結させようという計画を抱いていた。'45年3月ケルンで助任司祭となるや、直ちに4年の任期で近くの工業の町エルパーフェルトに派遣された。その翌年秋、この地の教師プロイアと親方テイル（二人ともカトリック信者）が奔走して初の青年職人協会を創設したとき、コルピングは「貴方がたは私が今迄ずっと熱望してきた物を遂にお作りになった」と熱烈な拍手を送り、その翌年には彼がこの生まれたばかりの職人協会の宗教座長に就任し、本格的な活動にのり出すや、その組織は燎原の火のごとく前進し、ドイツ国境を越えてポーランドやバルカン諸国に迄ひろまった。<sup>[註35]</sup>コルピンは総論的な世界改良計画（例えばフーリエやマルクスなどの）をあまり問題にせず、天成の教育者らしく常に生身の個人とその苦難を問題とした。次の彼の言には正しく千鈞の重みがある：「誰か本当に惨めな人をその苦境から引っぱり上げようと一度やったことのないうちは、人間の悲惨さを改善することの難しさなどわかりはしないのです。以前に頭の中で万人の為にと思って考えたあまたのすばらしい計画も、この種の唯一回の試みで忽ち雲散霧消してしまいます。この時なお人が勇気をすべて失わないでおれたら、それこそ神に感謝してよいでしょう。」この根本姿勢から当然出てくるようにコルピン神父は職人・労働者を具体的にその家庭、その職、その国民、その教会の中に置いて対応した。神父は'65年、その活動の盛期に卒然として世を去り、ドイツの労働運動の第二期、つまりラッサール、マルクス、エンゲルスによる世界観的闘争的組織化には直面しなかったが、'48—'49のあの三月革命期にも協会の発展は少しも衰えなかったという。19世紀の中ごろ、産業化と国家主義、労働運動とダーウィニズムの巨大な波濤に宗教界が押しまわられて、教会が単に信者個々人の心情的な慰めのための集会所になろうという危機にさいして、ケルンを本部とする『国際コルピング活動』Internationales Kolpingwerkは、カトリック教会に近代的大衆社会の要請にも十分こたえうる道を開いてやることのできたのである。マルクス主義に基づく革命政党たる「社会民主

主義労働者党」の偉大な創設者にして指導者だったアオグスト・ベーベル(1840—1913)は、フライブルクでろくろ職人であった若い時から、プロテスタントであるにも拘らずこのカトリック職人協会の会員であったが、<sup>[註37]</sup>64年にそれから離れた後も、その事を少しも悔いていないと述べている。神父の没後100年、ナチス時代の大苦難をへて戦後再建されたKolpingwerkは1965年現在ドイツだけで支部数3,000、活動家数100,000人だという。<sup>[註38]</sup>

## 注

- [註1] E. ドラクロワの名画「民衆の先頭に立つ自由の女神」、1831年。  
 [註2] K. レーヴィト「ヘーゲルからニーチェへⅠ」、柴田治三郎訳、岩波書店1976、37頁。  
 [註3] レーヴィト、上掲書、35頁。  
 [註4] A. モロワ「英国史 下巻」水野・和田・浅野訳、白水社1941、320頁。  
 [註5] スタンダール作「赤と黒」(1831)の中で、主人公の罪状が殺人未遂だったのに彼が処刑されたのは、「卑賤の出である自分を許すことができなかつた地元ブルジョワ階級の憎悪の故である」とジュリアンが法廷で明言する箇所がある(第41章公判)。  
 [註6] レーヴィト、上掲書「Ⅱ」、32頁。  
 [註7] E. R. クルチウス「フランス文化論」大野俊一訳、創元社1942、134頁。  
 [註8] P. Abraham et R. Desné: *Manuel d'Histoire Littéraire de la France* IV(1), Les Editions Sociales, Paris, 1972, P. 409—412, 647—650.  
 [註9] 福井芳男「NHK フランス語<歌と詩>」、日本放送出版協会、1978、89頁。

彼女は通り過ぎた、若い娘  
 生き生きと軽やかにまるで鳥のように、  
 手には輝く花を持ち、  
 口には新しいリフレインを口ずさみ。

おそらくあの子はこの世で唯一ひとり  
 その心が私の心に答えてくれて  
 わが深い夜の中に入り  
 唯ひとつの眼差しで明るく照らしてくれるであろう。

いやちがう。わが青春は終わった……  
 さらば私に輝いたやさしい光線よ、  
 香り、若い娘、調和、  
 幸福は過ぎて行った——逃げて行った。

- [註10] 河野健二「ブルードン研究」、岩波書店1974、年譜9頁。  
 [註11] A. モロワ上掲書、268頁によれば1821年の英国人口は約1400万という。  
 [註12] 河野健二上掲書、3—5頁。  
 [註13] レーヴィト上掲書、35頁。  
 [註14] 河野健二上掲書、3頁。  
 [註15] 中世いらいの身分制国家における上層階級支配。貴族、僧侶、騎士、都市民から成る議会。  
 [註16] 後出 *Die Großen Deutschen* III, 203頁。  
 [註17] Fr. リスト「経済学の国民的体系」小林昇訳、岩波書店1970、519頁。  
 [註18] このⅡ、の項については、H. Heimpel, *Th. Heuss* (初代の西ドイツ大統領)、B. Reifenbergの共編に成る *Die Großen Deutschen <Deutsche Biographie>* 3. Bd, Prisma Verlag 1978, の *Th. Heuss*: Fr. List の項と、リスト上掲書の訳者解説に多くを負っている。  
 [註19] 生家はヴェストファーレンの著名な実業家で、農林・鍛冶・金物を営業としていたし、彼も Hagen 商業学校の出である。

- [註20] シュタインは当時ヴェストファーレンに隠退して、「古代ドイツ史研究会」を創設し主宰していたが、統一国民意識のシンボルとしてのその声名はなお衰えていなかった。
- [註21] '50年代のプロイセン国会議員としての彼は常に民主的野党派にぞくし、特に、東部ユンカーに対する税の優遇措置、軍隊における民主的要素の軽視、他国に比してのプロイセン小学校教育の後退などを批判し続けた。
- [註22] 現在Duisburg に本社を置く *Deutsche Maschinenfabrik AG* 「ドイツ機械製作株式会社」。
- [註23] *Die Großen Deutschen* III, 419頁。
- [註24] 更にいえばヘーゲル左派の一人で早くから政治経済学に開眼したローレンツ・シュタイン (1815—1890) が、パリでの視察と研究の成果である「今日のフランスの社会主義と共産主義」を世に問うて人を驚ろかしたのも1842年であった。
- [註25] *H. Heine Werke*, Insel 1968, 2. Bd; S. 164—165.
- [註26] 家庭・職業・直感の教育を実践したJ. H. Pestalozzi (1746—1827) の理念は1806年のプロイセン内政改革にもすでに採用されていたし、彼の名著「ゲルトルートはその子供達をいかに教えるか」(1801) は全欧州で読まれた。また彼の後継者Fr. Fröbel (1782—1852) の広範な体系書「人間教育」も'26年に出版されている。
- [註27] *Die Großen Deutschen* III, S. 358.
- [註28] ルール地帯の紡績業の町, Fr. エンゲルス の生地。
- [註29] *Wilhelm Treue: Deutsche Geschichte, Kröner* 1965, S. 537—538.
- [註30] *Treue* 上掲書, S. 539.
- [註31] (1803—'75)。ドイツ哲学に深く通じた無神論の歴史家, *College de France* 教授。
- [註32] ゴーロ・マン「近代ドイツ史 I」上原和夫訳, みすず書房1973, 96頁。
- [註33] *Die Großen Deutschen* III, S. 357.
- [註34] H. ゲムコー「フリードリヒ・エンゲルス—伝記」土屋・松本訳, 大月書店1973, 第1章。
- [註35] '55年には協会数104で12,000の会員数,'64年には420協会で60,000の会員をようしていた。'63年にラッサールの創立した「ドイツ総労働者協会」の会員数は彼の死亡した'64年にやっと6,400人であった。*Die Großen Deutschen* III, S. 360.
- [註36] *Die Großen Deutschen* III, S. 361.
- [註37] *Die Großen Deutschen* III, S. 360. およびS. 553. なおIII, の項とIV, の項も, 上述の *Die Großen Deutschen* III のFr. Harkort とA. Kolping の項に多くを負っている。
- [註38] *Brockhaus Enzyklopädie* 7. S. 218.

(旭川医科大学 ドイツ語)